

女性議員はなぜ増えないのか？

三浦 まり 上智大学法学部教授

突然の解散で実施された総選挙の結果、女性議員比率は8.1%から9.5%へと微増した。

しかし、過去最高値の11.3%（2009年）には及ばず、一桁台にとどまった。この数値を列国議会同盟の最新のランキング（2014年11月1日）に当てはめ、同一順位を繰り下げよう調整すると、日本は189ヶ国中153位となる（選挙前は162位）¹。国連ウィメンは女性議員比率が10%に満たない国は2014年1月時点で38ヶ国あると警鐘を鳴らしているが、不名誉なことに日本は現在もまだそのうちのひとつである²。

女性議員の少なさは、指導的立場に就くことが女性にとって未だ厳しいことを意味する。政治のみならず、企業や労働組合においても、ポジションが上がるごとに女性は減っていく。なぜ女性のリーダーは誕生しにくいのか。制度的理由はさまざまあるが、今回は性別役割分業とジェンダー・ステレオタイプに焦点を当て論じてみよう。

性別役割分業との闘い

女性の社会進出—それまで男性によって占められた領域に女性が入っていくこと—にはさまざまな困難が伴うが、それが政治ともなると一層高い障壁が存在する。女性議員が誕生しにくい根源的な要因として性別役割分業があり、それと一体となってジェンダー・ステレオタイプが重なることで、さらに高い壁が構築されているからだ。

性別役割分業とは、性別によって役割や仕事が変わるという社会通念と実践であるが、具体的には男性は外で有償労働に就き、女性は家庭で無償労働に従事することを意味する。共働き世帯が片

働き（専業主婦）世帯を数では上回る現在においても、夫のほうが高い賃金を得て主に家計を支え、妻は外で働いているかどうかにかかわらず、家事労働やケアの大部分を担うという性別役割分業は根強く維持されている。

政治家という職種は長時間労働を余儀なくされ、時には家族総動員で支える個人商店のようなものだから、性別役割分業は女性に対して不利に働く。ケア等の家族的責任を担いつつ政治活動を行うことはほとんど不可能に近い。

自民党の大久保三代は在任中に次女を妊娠・出産したが、地元（石巻市）への貢献が不十分であるとして今回の選挙では公認を得られなかったと報じられている。また民主党の高井美穂は衆議院議員候補者の公認を辞退し、地元で子育てできる県議会議員に出馬する意向を表明した。双方とも背景には選挙区事情があるにせよ、性別役割分業が女性の政界進出を阻む障壁のひとつであることを物語る象徴的な事例である。

共産党の引退した女性議員は、出馬に当たって家事労働は党がすべて面倒を見てくれるという条件であったと語っている。このような例は稀であろうが、政党が女性議員を本気で増やしたいのであれば、男性議員を支援するのとは異なり、私的領域にまで踏み込んで配慮が求められることになる。

また、性別役割分業のもとでは、家族資源が男女で異なることも留意する必要がある。男性政治家は地元活動や選挙運動において妻に頼ることが可能な場合が多いが、女性政治家はそのような頼れる夫を持つことはあまりない。女性が政治家の息子と結婚して、地盤を引き継いで出馬すると

いう例も聞いたことがない。女婿として政治家へのチャンスを掴むという玉の輿ルートは男性だけの特権である。

ステレオタイプとの闘い

男性らしさ・女性らしさに関するジェンダー・ステレオタイプも女性の社会進出を阻む壁である。男性らしさ・女性らしさの規範があるために、女性は女性らしいとされる仕事を選択する傾向があるが、政治家という仕事は男性らしさの記号に満ちあふれている。

ジェンダー・ステレオタイプの内容は社会によって異なるものの、現在の日本においてもまた欧米においても、決断力、タフさ、押しの強さは男性らしいとされ、思いやり、共感、優しさは女性らしいとされる。男性性に割り振られた決断力やタフさは政治家（リーダー）に求められる資質であるから、女性政治家は政治家としてこれらの資質が備わっていることを見せる必要があるが、しかしながらあまりにタフであると今度は女性らしくないという批判に晒される。こうした「二重の縛り」は、女性政治家だけが直面し、何らかのかたちで乗り越えなければならない壁である。

権力への野心も、男性には肯定的に、女性には否定的に評価される傾向がある。政治家になることは、権力への野心を公言することであるから、女性にとっては男性にはないリスクを抱え込むことになる。権力志向の強い女性政治家は有権者の一部から激しい怒りや侮蔑を買うことさえある（Hilary M. Lips, *Gender: the basics*, Routledge 2014）。

さらには、女性への評価は身体的な魅力に基づくことが常であるため、女性政治家も見かけの善し悪しを絶えず論評される。髪型や服装はメディアに格好の話題を提供する。身体的な特徴が大きさに論じられることで、女性政治家の政治家としての資質は二の次であることが暗に語られ、また社会もそれを受容してゆくのである。

リーダー像の転換

女性議員たちは性別役割分業における不利な状況を克服し、そのうえでジェンダー・ステレオタイプとも闘っていかなくてはならない。ステレオタイプは社会に広く浸透しているため、有権者からの支持を得なければならない政治家は、ステレオタイプと、時には利用し時には抵抗を試みながら、付き合っていくことになる。

しかし、政治家には常に男性的な資質が求められるものなのだろうか。リーダーにはタフさ、攻撃性、権力欲が必要であり、思いやり、共感、優しさに溢れた「女々しい」人物はふさわしくないのだろうか。多様な価値観が存在するなかで合意を形成するには、押しの強い人よりも他人の意見に耳を傾け共感力に強い人のほうが適任であろう。権力集中・上意下達型の組織のトップは男性性規範が適格的だが、権力分散・水平型のネットワークには女性性規範に適格的な振る舞いがむしろ必要とされるのではないだろうか。

女性議員経験者からはよく「女は政治に向いている」と聞くことがある。広い層とのネットワークが得意で、しがらみや面子に囚われず判断ができる、という意味である。

このように考えると、女性議員を増やすためには私たちの持つリーダー像の転換が必要であることが分かる。権力分散・水平型社会ではジェンダー・ステレオタイプが女性に不利に働かないため、女性議員の活躍の余地も広がる。逆に言えば、女性議員が増えることによって政治のあり方も対決型から合意形成型へと変容することが期待できるのである。（みうら まり）

《注》

- 1 IPU(<http://www.ipu.org/wmn-e/arc/classif011114.htm>, 最終アクセス: 2014年12月17日)。
- 2 UN Women, "Facts and Figures: Leadership and Political Participation" (<http://www.unwomen.org/en/what-we-do/leadership-and-political-participation/facts-and-figures>, 最終アクセス: 2014年12月17日)。